

九つの災害（その4）「礼拝への姿勢」 出エジプト 10 章 1～29 節

(1節) 神様は今、モーセに命令をしています。「ファラオのところに行け。わたしは彼とその家臣たちの心を硬くした。・・・」それは強情なファラオの所にモーセに大胆に出て行くようにという命令でした。何故でしょう？ そして、神様はなぜファラオをあえて強情にされたのでしょうか？ その理由は、3つあります。

——— 3つの理由 ———

- ・その1 (1節)「わたしが、これらのしるしを彼らの中で行うためである。」
エジプトの中で、神の力の偉大な業を行うためでした。
- ・その2 (2節)「また、わたしがエジプトに対して力を働かせたあのこと、わたしが彼らの中で行ったしるしを、あなたが息子や孫に語って聞かせるためである。」
神様が、エジプトの中で行った偉大な働き、奇跡を子孫に伝えるためでした。
- ・その3 (2節)「こうしてあなたがたは、わたしが主であることを知る。」
神様が主であることを、イスラエルの人々が知るためでした。

——— 審きの目的が変わった ———

神様は、モーセが神様に従って歩むなら、そこに神の奇跡を起こし、神ご自身を現わし、証を与えると約束なさいました。神様の力ある業、奇跡は、今まではファラオやエジプトに対しての審きという形で行われて来ました。しかし今や、審きの目的が変わりました。イスラエルの民の教育が目的となりました。

——— 証について ———

さて、証について感じたこと。最近は礼拝の中で証がなくなりました。また再開したいと思います。

でも最近の証で感じる事は、なにか皆、自分のことを語っているように感じます。神様のことを語っていないのです。そうではなくて、自分の体験した具体的な出来事を通して、神様を体験したことや、許されたこと、神様の愛に触れたこと。等々・・・。神様の臨在を体験できる様な、神様が見えてくるような、神の迫りを感じるような証を聞きたいですね。

——— 第8の災害、(3～20節)「いなごの襲来」———

(3～6節、読む)

(7節) ファラオの家来たちは、このいなごの予告を聞いて心を痛め、ファラオに進言しました。「・・・この者たちを去らせ、彼らの神、主に仕えさせてください。エジプトが滅びるのが、まだお分かりにならないのですか。」

(8、9節) ここに至ってファラオはモーセとアロンを呼び出して言いました。「行け。おまえたちの神、主に仕えよ。だが、行くのはだれとだれか。」モーセは答えます。「若い者も年寄りも一緒に行きます。息子たちも娘たちも、羊の群れも牛の群れも一緒に行きます。私

たちは主の祭りをする（礼拝）のですから。」

（10、11 節、読む）ファラオは答えます。「・・・そうはさせない。さあ、壮年の男子だけが行って、主に仕えよ・・・」ここで、ファラオが許可したことは、「イスラエルの男子だけは、荒野に行って礼拝しても良い」という事でした。しかし、これは裏を返せば、

- ① 女と子供は礼拝をしなくても良い。
- ② 家族を人質に取る、
- ③ 家畜などの財産を確保してしまう。ということなどです。

もちろん、モーセとアロンは断固、これらの提案を拒否しました。

（12～14 節、読む）第 8 番目の奇跡が起こされました。東の風に乗って、いなごの大群が運ばれてきました。（15 節）「それらは全地の表面をおおったので、地は暗くなり、いなごは地の草と、雹の害を免れた木の実をすべて食い尽くした。エジプト全土で、木や野の草に少しも緑も残らなかった。」

ここに至って、とうとうファラオは、モーセとアロンを呼び出して言いました。

（16、17 節、読む）それにしてもファラオは今、少し前に言ったことも、忘れて、その場その場の都合に合わせて、平気で何でも口に出してしまう、まさにファラオは当てにならない人物でした。

（18 節）この様な、いい加減な人物の悔い改めでも、モーセは信じて、受け入れました。彼を哀れんで祈りました。「モーセはファラオのところから出て、主に祈った。」

（19 節、読む）いなごは、あっという間にいなくなりました。

（20 節）「しかし・・・彼はイスラエルの子らを去らせなかった。」本当に残念ですね。残念のひとことにつきます。

この様にして、エジプトは大打撃を受けます。ファラオの要請に応じてモーセはいなごの除去を祈り、それは神に答えられました。しかし、ファラオは変わりませんでした。

——— 第 9 の災害、(21～29 節)「暗やみ」 ———

さて、ここにおいて、第 9 の災害が起こります。「暗やみ」です。

（21～23 節、読む）厚い闇が 3 日間、エジプト全土をおおいました。これは大風が砂塵を招いて、天地に広がったのでしょう。元来、エジプト人は太陽を拝む国民でした。その太陽が光を失ったのです。つまり、まことの神様は、エジプトの人々が拝んでいる偶像に、つまり太陽に一撃を加えられたのでした。

（23 節）「しかし、イスラエルの子らのすべてには、住んでいる所に光があった。」

この現象に、イスラエルの人々は、どんなにか励まされたことでしょう。

(24 節、読む) しかし、エジプトの国中に暗やみは 3 日間続きました。ここに至って、ファラオはまたもや妥協案を出してきました。条件付きで出国を、礼拝を認めました。ファラオはイスラエルの人々が、主を礼拝するために、全員が行くことに同意しました。しかし、家畜はエジプトに残していくことを要求しました。

(26 節) しかし、モーセははっきりと拒絶しました。「私たちの家畜も私たちと一緒にいきます。ひづめ一つ残すことはできません。・・・」
更に付け加えました。「・・・私たちの神、主に仕えるために、家畜の中から選ばなければならないからです。・・・」これらの家畜（全焼のいけにえとなるもの）は、神様になだめの香りを献げるために、どうしても必要なものなのです。ここに「十字架信仰、全き献身の信仰」をみます。

でもファラオは、2 つの妥協案にこだわりました。

① 11 節「・・・壮年だけが行って、主に仕えよ。」

② 24 節「行け。主に仕えるがよい。ただ、おまえたちの羊と牛は残しておけ。・・・」

ここでは、礼拝について考えさせられますね。

——— 礼拝への姿勢 ———

礼拝というのは「私だけで、男だけで」というように、ある特定な人だけがするものではありません。神様に造られたすべての人は礼拝する特権があるのです。特にこの時代は罪ある人間が礼拝するには、どうしても身代わりのいけにえとなる動物は必要だったのです。

私たちは自分一人で、更に人間だけで、神様を礼拝出来ると思っていないのでしょうか？

神に喜ばれる礼拝とは、男も女も子供たちもみんなで、更に自分とかかわりのある自然界のすべてのものに助けられて、自分自身を、神様献げて行くことではないのでしょうか。

——— 決裂！ ———

さて、二人の関係はついに決裂となりました。

(28、29 節)「ファラオは、彼に言った。『私のところから出て行け。私の顔を二度と見ないように気をつけろ。おまえが私の顔を見たら、その日に、おまえは死ななければならない。』」
モーセは言った。『けっこうです。私は二度とあなたのお顔を見ることはありません。』」

やはり、ろうと泥とは、一緒にはなれません。

水と油とも、一緒にはなれません。

善と悪とも 一緒にはなれません。

光とやみとも 一緒にはなれません。

私たち、一緒になれないものを、一緒にしようとしていることはないのでしょうか？

世の人はほどほどの信仰ならば認めてくれます。でも主は献身的な礼拝を求めておられます。御子を与えたほどに私たちを愛された主の愛に、私たち応える礼拝を献げましょう。